

【なんくるない】

山田くんの五歳の妹の花子が、原因不明の病気になって、いよいよあぶないというので、川向こうの医者に診せることになりました。

ところが前夜の豪雨（ごうう）で大川の大橋が流されてしまい、舟をつかうには川の流れが烈しすぎるし、みんなで困った困ったといっているところへ、気味のわるいおやじがやってきました。

「おまえはだれじゃ」

とぼくがきくと、

「【なんくるない】という仙人じゃ」

とおやじがいました。

「仙人ならなんとかできるじゃろ」

と山田くんがきくと、

「橋がなくても、舟をつかわんでも、向こうに渡る方法があるぞ」

自信満々にこたえました。

「どうすればいいんじゃ」

「なあに、右の足を一步出して、その足が沈まないうちに、左の足を出す。その左の足が沈まないうちに、こんどは右の足を出す。そうやって川の上を歩けば、どうってことはない、向こう岸に行ける寸法じゃ」

「なるほど」

と村の大人たちは感心しました。

ぼくは感心しなかったけれども、仙人の【なんくるない】なら、なんということもなく渡れるのだらうと、

「ならば、やってみい」

といました。

村の大人たちも、つられて、

「やってみい、やってみい」

といました。

「よっしゃ」

と【なんくるない】は気合いをいれると、花子をおんぶして、川の面をすばやい足さばきで走り出しました。

いける、いける。

ところが、五分の一も行かないところで、

「あちゃー」

という悲鳴とともに、【なんくるない】はあえなく沈んでしまい、花子も流されてしまいました。

ぼくはすぐさま川に飛び込みましたが、すぐさま溺れてしまい、懐爺の名を連呼しました。

するとどこからか、懐爺が現れて、現れるやいなや、大川に飛び込んで、花子とぼくを救ってくれました。

花子もぼくも、肺にしこたま水がはいっていましたが、懐爺が吐き出させてくれました。

ぼくはその後一ヶ月間肺炎で苦しみましたが、花子は元気になりました。

あとで川向こうの医者がいうには、花子の肺にはもともと水がたまっていて、それが川水といっしょに吐き出されたので、病気がなおったとのことでした。

残念ながら【なんくるない】の行方はわかりません。

噂では、足の筋肉がつったままなおらないらしく、松葉杖をついた姿が、大川の畔（ほとり）でたまに見られるとのことでした。